

カレーライスを作る

たいくつな日曜日 キッチンに立つ
今夜はカレーライスだ
ひとり暮らしだから
インスタントでかまわないけれど

馬鈴薯の芽をむしり
昔の恋を想いながら 新タマネギを
スライスする包丁が踊る やはり
こだわりがあるんだ

牛肉はやっぱり安物に限る

そいつをたっぷりの大蒜で炒めながら
先週 三十七歳で死んだ友だちのことを想う
(きょうぼくは誰の一日を生きたのだろうか)
窓の外では他人の太陽が焦げついている

空になった缶ビールが床に転がり
小鳥たちが
ミャンマー語で歌をうたいたす頃
ある祈りにも似た痛みが噴きこぼれ
ぼくの特製カレーライスは完成する

ほとんど血の色に煮詰まったルーを
ふたつの食器に取り分け 赤ワインの
グラスを傾ける「君のためにこしらえたんだ」
闇にささやき ぼくはひとり夕餉にむかう

水の由来

明ぼのやしら魚しろきこと一寸

芭蕉

さて水が

濡れているか乾いているかは

いたむ指さきに

訊ねなければならぬ

わたしの命は

風いでいるか耐えてはいないか

草の葉の裏側に

しゃがみこんで割れた

いもうとに朽ちたひかりを挿し

こんでこれは問うてみたい

もえる藁

いつまでも裂けつづける魚

とあかるい乳房

痛い痛いと呼び声をあげる花々

をひかえて誰かが

わたしの名前を呼ぶことはないだろうか

とまどう一行 がここにある

ああ

あらゆる夜をはらんで

水はこんなにもつめたく流れているというのに

死はおれの間近に

死は
いつも

おれの間近にひかえている

痩せた猟犬のようにまんじりともせず

じっとおれの帰りを待っている

旅に病んで死んでしまった詩人の評伝をめくりながら

電気コタツにもぐりこんだまま眠りこけてしまっても

みどりという名の娼婦の

「三人の子供に吸われたの」という

やはり痩せた乳房の

あいだにつかれた頭をつっこんで果ててしまった　としても

おれのアパートにやってくる朝は
どこの朝刊よりも

だれの牛乳よりも早く届けられるんだし

ひりひりと薄暗くうそ寒いというのに

おれの死は

静かにおれの目覚めを待っている

——いのちがつめたくなってきたいるんだね

安酒なんかあおって祈祷師のまねをしても駄目だよ

死は

おれの朽ちたからだのあちらこちらに散らばって

痛いいたいとおれが

泣きごとをいいはじめのを待っていやがる

あほらしい

おれは今さら泣いたりほしないさ

泣くことがもうないじゃないか

おんなのかたちもわすれてしまった
おれが書き記すことばは
とおい昔

誰かが書き記した色褪せたことばだから
感情みたいにあまく滞ることもないさ
死は
くたびれたおれのうすい影だ

さて おれは

死の色のコートをはおり

夜の街をまたぞろさまよい歩くとしよう
なに心配はいらない

たぶんまだ死にやしないさ

休業中の雑貨屋の角で

いっぴき 耳の折れた犬が眠っているが

まさかやつに咬まれることもないだろう
やつはおれの死ではないだろう

おれの死はもっと静かに

おれの間近で

おれの一瞬の油断を待っているだろう。

指を焼く

深夜

ちいさな机の周りに

ちいさな闇を呼び集め

ぼくは ぼくの指先に

火を点す

—— ずぶ濡れの黒猫みたいに凍えている奴ら

とりあえず

やくざな糸切り歯を取りだして

ほそい指先を噛むきつく噛む

ちいさな痛みが

フレッシュな血に染まって

それが昔の恋人の

熟れた性器に似ていることを確認したら

ひとしきり ぼくは

あの少女のように泣くだろう

涙は

人間の感情

からあふれ出る

唾液みたいなものだから

ぼくは指先をそれに浸し

そつと火を点す

くらやみに濡れたぼくのいのちは

すると

バーナーみたいないっぽんの蠟燭となって

ぼくの目と舌を燃やすだろう

そしていくつかの

星座を焦がすだろう
薄い夜の帳をぱりぱりと剥がして
あたらしい悲しみが 産声をあげるまで
ちいさな闇の下で
柗の梢みたいにのびたぼくの
指先は燃えつつける